

○名古屋大学大学院教育発達科学研究科 柴田好章 教授のご指導

- 1 単元構成の中でアクティブラーニングはどれくらいいるか？ という質問を別の研究会でもらった。教師の説明が中心となる授業であっても、最後にパフォーマンス課題が設定されていて、生徒が活動する授業ならば、それはアクティブラーニングを取り入れた授業である。教師がアクティブラーニングの意識を持つことが大切である。
  
- 2 発表の中で書かせると書けないという指摘があったが、国語の授業そのものが「書かせ最良」になっている。「話す文化」もあり、「書く文化」もあるが、日本は「書く文化」が中心になっている。授業の中では、話すことも書くことも両方を評価してよい。それが「多様な評価」である。  
「話すこと」は発散的な思考であり、クリエイティブな活動である。それに対して、「書くこと」は収束的な思考と言える。どういう方面で、どういう思考が必要であるかを見極めて指導していくことが必要である。一つの授業(単元)の中でも、発散から収束へと  
いう展開も可能である。
  
- 3 評価についていえば、必ずしも「書くこと」にこだわらない評価があってもよい。机間指導段階での評価規準があってもよいのではないか。ただし、これにはアイデアが必要だ。
  
- 4 アクティブラーニングにおいて、問がなぜ大事か。子どもたちにとって問いたい問なのか、考えたい内容なのか、ということが大事である。問いたい問であれば、後ろから押してやればよい。そう考えていくと、教材研究がとても大事になってくる。深い教材研究が必要になってくる。
  
- 5 他校や校内への広がりはどうやって作っていくかということについて参考になる報告であった。料理に例えれば、レシピづくりをやっている。素材を変えられるレシピを作ることが大切である。いっしょに悩みながら作っていくことが、広める秘訣である。